

## 論文

# 学校統合に伴うモンゴル民族教育の変化 小学校の事例分析を中心に

賽 漢花<sup>†</sup>

## 要約

本論文では、中国内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗・バヤンウンドウルソムにおける民族小学校で現地調査を行った。言語教育（モンゴル語）と「故郷」の授業を参与観察して、学校統合に伴う影響を分析した。統合前の学校の実態を明らかにするために、聞き取り調査を行っている。聞き取り調査について、教育関係者や地域の保護者と卒業生の教育体験を事例にしている。また、言語生活、伝統文化体験など民族生活の全体に迫っているところに意義がある。少数民族出身の生徒とその保護者、教育者たちがどのような対応がされているか、また、どのような意識を持っているかに注目する。寄宿制民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などに焦点を当て、学校統合に伴う民族教育の変化と影響について考察することである。

## キーワード

民族教育、学校統合、赤峰市

<sup>†</sup>愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員

## はじめに

本研究の目的は、中国内モンゴル自治区における学校統合に伴う民族教育の変容を明らかにし、その変化が民族教育に対していかなる影響をもたらしたかについて、現地調査に基づき考察することである。

内モンゴルにおける学校統合政策は、2001年6月17日の「国務院の基礎教育改革及び発展に関する決定」と2002年5月15日の「内モンゴル自治区の小学校・初級中学校の配置調整に関する決定」に端を発する。この政策の主な目的は、教育資源の科学的かつ合理的な配置、教育の質の確保、学校運営の効率化とコストの削減などである（ハスゲレル2016：12）。2006年に施行された「中華人民共和国義務教育法」において、「県級の人民政府は地域毎に寄宿制学校を設立し、居住分散地域の適齢児童・少年を入学させ、義務教育を保障する」と規定されていた。従って、寄宿制学校は中国少数民族地域の特性に合わせた、法律的に保障された学校制度となった。その実施が中国の少数民族学校教育のモデルともなっている内モンゴルから始まっている。本研究が内モンゴルに注目する理由は、このケースが全国の少数民族教育に影響する可能性があり、その現状を知ることは中国全体の少数民族の民族教育の今後を知るために必要だからである。

この学校統合の実施に伴い以下のような問題が起

きた。

まず、全国的に就学前の子供の数が減り（図1）、それに従い生徒数の減少が起きた。これが、80年代から始まった計画生育政策の影響であると考えられる。例えば、2005年になると就学前の子供の数が2000年に比べて全国で2.65%減り、内モンゴルで4.18%減った。

次に、2001年から実施し始めた地域の税金の改革で教育への投資は主に増税、募金などに頼っていたのを停止させたことは、バラガス鎮の財政の負担になった。このような状況で各学校を廃校し、統合させ、予算を削減した。そのため、2001年～2004年までの4年間で、全国の小学校3万1,700校を統廃合させた。内モンゴル自治区では、2001年～2006年の間で、中学校と小学校を合わせて8,039校を廃校させた。その結果、小学校は4,428校となり、前より47.5%減り、中学校は465校となり27.9%減り、小学校の教育は3,146校となり68.4%減った（ハス額ル敦2017：209）。

これまでの中国の少数民族教育に関する研究では、民族教育の衰退の原因、民族学校数と生徒数の減少の要因について指摘するものが多い（スチンテクス2013）。その多くは、中国の少数民族教育政策に焦点を当てている。内モンゴル自治区のモンゴル民族の教育現場で実際に行っている教育について分

析したものはほとんどない。現実の教育がどのぐらい（量的に）発展してきたのか、そこで発展を阻害しているのは何かといった点を指摘しているだけである。しかし、少数民族教育の目的と照らし合わせた場合、その拡大の裏で何が失われているのか、また何を見落としているのかを詳細に検討する必要があると考える。

内モンゴル自治区のモンゴル民族の教育の現状とその抱える問題点を課題にした研究はごく最近、注目され、行われるようになった。代表的な論文を取り上げ、その特徴と残された課題について述べる。

岡本（2008：4）は、「しかし中国の場合、法律はこう定めている、政策はこうなっている、民族学校は何校あり……といった政府の公的立場やハード面の情報は、対外的にも積極的に流れる一方で、ソフト面の状況—現状での実施状況や具体的な反映、成果、当事者たちの思いなど—は、不思議なほど伝わってこない」と指摘し、中国の少数民族学校に対する政策について、中国の少数民族教育の実情と全体像を体系的に描いている。牧畜地域、牧畜民という視点からの言及は少ない。

ハスゲレル（2005）は、「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題—教科書分析を中心に—」において、モンゴル民族小中学校で使用されている母語（モンゴル語）と歴史の教科書を分析し、教育内容のあり方を検討した。文化史、民族史の内容が少ないことが民族意識の形成に影響していることを課題とした。しかし、民族の意識の育成について論じるには、全国共通科目である「課外活動」という科目の内容を加える必要があると考える。その内容はすべてが民族文化教育として位置付けられているわけではないが、この「課外活動」では、内容は各学

校自身でアレンジでき、担当する教諭がその内容を決めた教科書を使うことができる。この「課外活動」には、特定の教科書はなく、一つの活動として行われている。ハスゲレル（2005）では、この「課外活動」については触れていないという課題が残っている。

烏力更（2013b）は、「中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究」において、「内モンゴル自治区の寄宿制民族学校教育に焦点を当て、中央政府の政策下にある少数民族学校教育の持つ内在的要因を分析し、その教育という要素が少数民族の次世代のアイデンティティの確立を阻害しているのかを明らかにすることを課題にした。でも、寄宿生民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などについて触れていないという課題が残されている。

ムンクバト（2014）は、モンゴル人のアイデンティティ、二（三）言語政策、教育政策の面から民族教育が研究され、研究の広がりが認められるが、やはり牧畜地域の研究が少ないと指摘する。そこで、ムンクバト（2014）は、内モンゴルの牧畜地域、特にシリングルにおける民族学校の状況を明らかにした。また、牧畜民の生活環境、言語教育、文字使用について詳細に分析した。彼は、西ウジムチンにおける民族学校の統廃合についても触れている。寄宿制民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などについて触れていないという課題が残されている。

そこで、本論文では、中国内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗・バヤンウンドウルソムにおける民族小学校で現地調査を行った。言語教育（モンゴ



図1 モンゴル語で授業を受ける生徒数の変化  
 (出典：赤峰市教育局（2009）に基づき、筆者作成。)

ル語)と「故郷」の授業を参与観察して、学校統合に伴う影響を分析した。統合前の学校の実態を明らかにするために、聞き取り調査を行っている。聞き取り調査について、教育関係者や地域の保護者と卒業生の教育体験を事例にしている。また、言語生活、伝統文化体験など民族生活の全体に迫っているところに意義がある。少数民族出身の生徒とその保護者、教育者たちがどのような対応がされているか、また、どのような意識を持っているかに注目する。寄宿制民族学校教育の実施状況や具体的な民族文化に関する教育内容の変化、言語環境の変化、民族の伝統的日常生活環境の変化などに焦点を当て、学校統合に伴う民族教育の変化と影響について考察する。

調査方法と調査地域

1.1 調査方法

本論文では、中国内モンゴル自治区における学校統合政策に伴い、民族教育がどのように変容したかを現地調査に基づいて明らかにし、学校統合政策が民族教育に対してもたらした影響について考察することを目的としている。

そのため、本論文では、現地調査、事例の分析、インタビューと雑談、文献資料の分析などの研究方法を中心にしている。

まず、牧畜地域における民族教育現場で参与観察を中心とした現地調査を行った。筆者は、調査対象地域である内モンゴル自治区赤峰市で、2010年から2016年にかけて、断続的現地調査を実施した。具体的には、以下の通りである。

- ① 2014年3月1日～4月1日にかけて、赤峰市アルホルチン旗バヤンウンドゥルソムに位置するバヤンウンドゥル小学校で現地調査を行った。
- ② 2014年6月3日～7月6日にかけて、赤峰市モンゴル実験小学校で現地調査を行った。

次に、文献資料の分析である。主に、中国の1950年代以降の公表された中国少数民族教育政策と具体的な教育カリキュラムを整理、分析した。中国少数民族教育に関する国務院決定、政策文書、報告書などを収集した。内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の発展してきた根拠を提示するために、モンゴル民族教育の歴史の発展を調べることが必要である。そのためには、『モンゴルの秘史』、『蒙古学百科全書 教育編』などの歴史資料や、先にあげた中国少数民族教育に関する国務院決定、少数民族教育に関する政策文書、少数民族教育に関する報告書などの資料を使用した。さらには、実際に教育関係者、教育現場の経験者、保護者、生徒などへのインタビューにより一次資料を入手することを重視した。

筆者はこれまで、2010年から2015年まで断続的に4回にわたり、内モンゴル自治区赤峰市の学校統合後の民族学校で調査を行ったが、こういった内モンゴル自治区赤峰市の学校統合後の民族学校を対象にした調査の例もなく、これらの調査を行ったことにより、学校統合に伴った民族教育の変化を明らかにすることができた。そこで得られた調査結果は、本研究を特色づけるものとして重きをなすものである。

本論文では、初等教育に注目した。その理由は、初等教育は、学校統合に伴う最も激しい変化の中にあり、教育の質の確保をするためにその変化を明らかにすることが必要とされているからである。

1.2 調査地域

調査対象地域(図2)は、中国内モンゴル自治区赤峰市である。内モンゴル自治区の東南に位置し、その面積は約9万平方キロメートルであり、その人口は約460万人で、内モンゴル自治区で最も人口の



図2 調査地域 (出典：内モンゴル自治区地図(2004)を基に筆者作成。)



多い地域行政区である。その中の約 80 万人がモンゴル民族である。半農半牧の割合の違う地域が広がり、遊牧地域も一部残されている。赤峰市には、三つの区（紅山区、松山区、元宝区）、二つの県（寧城県、林西県）、七つの旗（バイリンバラゴン旗、バイリンジゴン旗、ハラチン旗、ウハン旗、オンニゴド旗、ヘシゲテン旗、アルホルチン旗）がある。全赤峰市には、19 のソム、85 の鎮、28 の郷、2,089 のガチャがある。

アルホルチン旗は赤峰市の東北に位置し、その面積は、14,277 平方キロメートルであり、11 のソム、245 村がある。その人口は、29.6 万人で、そのうち、モンゴル民族の人口は 11.3 万人、漢民族の人口は 17.6 万人である。バヤンウンドウルソムはアルホルチン旗の中で唯一遊牧生活を維持している牧畜地域である。本論文では、都市部の赤峰市モンゴル民族実験小学校と牧畜地域のバヤンウンドウルソムに位置するバヤンウンドウル小学校を選択した。

## 2. 調査の結果

### 2.1 牧畜地域の民族小学校の変遷と地域の特徴

#### 2.1.1 アルホルチン旗のモンゴル民族小学校の変遷

本章では、赤峰市の牧畜地域における民族教育の現場としてアルホルチン旗の学校統合前のバヤンウンドウル小学校と学校統合後のバヤンウンドウル小学校の事例を取り上げる。アルホルチン旗のモンゴル民族小学校の変遷は以下の通りである。

アルホルチン旗の初めての小学校は、1945 年 10 月にチャブガ杆廟街において設立された光復小学校で、生徒数は 57 名であった。1946 年 8 月に、学校名を「チャブガ杆廟第一小学校」へと変更した。1946 年 4 月に、元東モンゴル自治政府のハフンガ副主席が民族文化を復活させる目的で、小学校の復活活動を始めた。復活活動は、坤都小学校の復活から始まり、各地に相次いだ。年末には、小学校 7 校、生徒数 584 名、教師 7 名であった。1949 年になると、全旗の小学校は 144 校、生徒数は 5,337 名、（そのうち女子生徒 1,430 人）、教職員 189 名であった。1956 年には、小学校 183 校、生徒数 14,746 名、教職員 442 名となった。1966 年から始まり 10 年間続いた「文化大革命」の時代では「民族問題は階級問題である」とみなされ、民族教育が圧殺された。1979 年には混乱が止まり、小学校が全面的復興した。同年、全旗小学校数は 397 校、生徒数 44,837 名、教職員 2,095 名であった。

1986 年～2002 年までは各ソムの各ガチャに民族小学校はそれぞれ 1 校、あるいは、地域の広いガチャには、2 校もあった。アルホルチン旗の北部に位置するバヤンウンドウルソムは面積が広くて、遊牧生活が維持されている地域である。2005 年まで

には、「バヤンチャガン小学校」、「シバリタイ小学校」、「マニト小学校」、「ダリハン小学校」、「シラボト小学校」、「バガバヤンウンドウル小学校」、「タリンホア小学校」、「ヘリム小学校」、「アルフブ小学校」、「シナ小学校」、「チャガンエリガ小学校」、「ボハト小学校」、「スミンタラ小学校」、「オルム小学校」、「サバハト小学校」、「マンハト小学校」、「タラバイ小学校」、「バヤンウンドウル総合中心学校」の計 18 の民族小学校があった。

2002 年から、地域のソムを合併させた上、小学校と中学校を一つにする「小中一貫九年制学校政策」が採用され、比較的交通の便が良い地域から政策が施行され始めた。

2005 年から、ソムの中心部に位置するバヤンウンドウル総合中心学校への統合が始まった。2011 年には、各ガチャの 18 校がバヤンウンドウル総合中心学校に統合され、学校名を「バヤンウンドウル小学校」へと変更した。その結果、各ガチャに小学校がなくなり、現在、バヤンウンドウルソムには、一つの民族小学校があるのみとなり、各アイル・ガチャの民族小学校は閉校となった。

#### 2.1.2 対象地域の特徴

バヤンウンドウルソムは、満州時代に「モンゴルの特徴を損なわず残っている牧畜地域」とされていた地帯であり、現在も牧畜業従事者は全労働人口の 86.8% を占めており（『アルホルチン統計年鑑』2003：118）、遊牧生活が維持されている代表的な牧畜地域である。そのため大部分の生徒たちは、遊牧生活を体験し、モンゴルの住居・食生活・年中行事にも参加している。バヤンウンドウルソムの人口は約 1 万人で、その内、モンゴル族は約 92.3% を占め、漢族は約 7.5% を占めてあり、昔からモンゴル族の割合が高く、主に牧業を営んで来た地域である。バヤンウンドウルソムは山地に囲まれており、このような地理的な条件により、交通が不便である。現在、コンクリート道路は敷設されておらず、雨や雪で通行止めになることが多い。

## 2.2 統合前のバヤンウンドウルソムの小学校の事例

### 2.2.1 学校統合前の 18 校の状況

統合前の学校の状況について、A 氏は次のように語った。A 氏は、統合前の「シナ小学校」の元教諭として、12 年間勤めた経験がある。

#### <事例 1>

A 氏（「シナ小学校」の元教諭、40 代、女性）

1998 年から、「シナ小学校」で勤め始めた。その時、教諭は 4 名、生徒は 38 名だった。

4人の教諭がすべての科目を担当するという状況だった。教室は足りていたが、体育館などの施設がなかった。その時、電話もなかった。ソムに来ないと教育局の情報も得られない状態だった。学校の統合で施設がとても良くなった。

この事例から、統合前の「シナ小学校」の施設が不十分であったことが分かる。また、教育局との情報交換が困難だったことが分かる。

統合前の学校の状況について、B氏は次のように語った。B氏は、統合前の「ボハト小学校」の教諭として、18年間務めた経験がある。

### <事例2>

B氏（「シナ小学校」の元教諭、50代、女性）

1995年から、「バハト小学校」で勤め始めた。その時、教諭は2名、生徒は19名だった。2人の教諭がすべての科目を担当するという状況だった。教室は足りていたが、体育館などの施設がなかった。この地域で冬は寒いから、他の教諭は生活に慣れなくて、途中で仕事をやめて行く人が多かった。その時、1人ですべての生徒の面倒を見るのは大変だった。生徒の教科書も遅く届くことがあった。

この事例から、統合前の「バハト小学校」の施設が不十分であったことが分かる。また、教諭が不足していたこと、教科書の配達が遅れていたことが分かる。

### 2.2.2 バヤンウンドウルソムの小学校の事例

以下は筆者の1989年～1994年頃の小学校時代の経験である。筆者は、先述の18校の一つである「バヤンウンドウル総合中心学校」の生徒として、当時の教育を経験した。

#### ①日常生活

1989年に、バヤンウンドウル総合中心学校に入学した。当時の生徒は全員が家から通っていた。同じ地域の子供で、両親も皆顔見知りだった。大雪や洪水の時、誰かが頼まなくても、互いに子供を身守っていた。家から学校までの間に川が流れていた。大雨が降った時、保護者達が馬で迎えに来る。子供たちを馬に乗せて、川を渡っていた。友だちと喧嘩したり、或は服を汚したり、授業から遅刻した時、地域の保護者から注意された。期末試験で良い成績を取った時や人を助けた

時、みんなに褒められた。

1年生の時からは、毎日、朝4時に起床する。母と一緒に牛乳搾りをした。私の役割は子牛を紐で柱と結ぶことであった。牛乳搾りが終わると、結んだ紐を外すことで、子牛が母牛のもとに戻り、再び残りのミルクを飲むことができた。牛乳搾りが大体6時に終わる。その後、母がミルクを待って家に戻り、朝ご飯を作る。私は6時から30分、牛の糞を干した。牛の糞は、暑くなる前に干した方がメリットはいっぱいあると母に教えてもらった。例えば、土とくっつかない、糞の中に、虫が入らないなどがあった。

当時は、1年生の生徒のほとんどの子供が1～1000までの数を数えるようになっていた。毎日家畜の数を数えることを子供たちに担当させた。そのことで、子供たちが自然に数学を勉強できていた。

#### ②学校の授業

1年生の時、学校では、モンゴル民族の挨拶の仕方と年上の人の呼び方などを教えてもらった。2年生の時、モンゴル民族の生活習慣とタブーのことを教えてもらった。例えば、モンゴルゲルの門を踏んではいけない、塩を手で渡してはいけない、夕方は歌を歌ってはいけないなどがある。3年生～6年生の時は、主にモンゴル民族の伝統的な文化に関する知識を身に付けた。学校では、ほとんどモンゴルの伝統的な遊びをした。例えば、羊の骨のザーガーなどがある。放課後、家では、骨占いも良くやった。

#### ③伝統行事への参加

小学校では、毎日第7限が活動の授業だった。内容として、主に、モンゴル民族の民謡、舞踊、馬頭琴の三つのグループに分かれて、体育館で、教えるか、練習していた。毎年のナーダムに参加するのも一つの目的であった。ナーダムとはモンゴル語で〈祭り〉という意味である。モンゴル国、内モンゴルでは草原を舞台にして主に競馬、相撲、弓の三大競技が行われる。また、伝統的民族楽器の馬頭琴の演奏や民族舞踊などを披露することもある。ナーダムの開始の時、モンゴル民族の民謡を歌う。夕方には、ナーダムの現場で、学校から組織した子供たちの演技会がある。ほとんどの生徒が参加するようにしていた。演技会では、子供たちが今まで練習してきた民謡を歌ったり、踊りを踊ったり、馬頭琴の演奏をする。牧民たちは、老人から子供まで



皆でこの演技会を見に行っていた。

1990年代は、牧畜地域では、定住化の政策がまだ進められていない時代だった。民族文化の基礎である伝統的な遊牧生活が維持されていた。現在の小学校では、1年生からモンゴル語を教え、2年生からモンゴル語と中国語を教え、3年生からモンゴル語、中国語、英語を教えるようになっているが筆者の小学校時代には、1年生からモンゴル語を教え、3年生から中国語を教えるようになっていた。「三言語教育」の政策は実施されていなかった。そのため、モンゴル語の時間数が多く、民族文化に関する知識の説明をする時間が十分あった。

### 2.3 統合後のバヤンウンドゥル小学校の事例

バヤンウンドゥルソムには、2005年までに、アイル、ガチャの18の小学校とバヤンウンドゥルソムの中心部に置かれていたバヤンウンドゥル総合学校を合わせて19校の学校があった。2011年までに、各アイル、ガチャの18校の民族小学校を移住させ、バヤンウンドゥルソムの中心部には、一つだけ寄宿制小学校が成立した。学校の名を「バヤンウンドゥル小学校」(写真1)へと変更した。全生徒数は、469名であった。



写真1 バヤンウンドゥル小学校  
(出典：2014年3月、バヤンウンドゥル小学校にて、筆者撮影。)

統合後の学校の教諭の状況と通学生徒について、C氏は次のように語った。

#### <事例3>

C氏(バヤンウンドゥル小学校の教諭、50代、男性)

学校の統合に伴い、110名の教諭が必要であることに對し、現在は61名の教諭が勤務し、教諭が不足している。子供の中には都会の学校に通う場合もある。地域の学校に通うべき子供たちは620名のはずだったが、151名の生徒は他の都会や近くのソムの学校に移った。その理由としては、経済的原因と保護者の出稼ぎがあると思う。

この事例から、学校の統合により、統合後の学校の教諭の不足状況と牧畜地域の生徒数が確実に減ったことが分かる。

2018年現在は、バヤンウンドゥル小学校は牧畜地域バヤンウンドゥルソムの唯一の民族小学校である。

#### 2.3.1 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表1に示すように、小学1年の授業はモンゴル語、数学、体育、サッカー、音楽、美術、品德、学校、担当、安全、故郷の11科目がある。モンゴル語は毎日1~2時間で、週当たり8時間である。数学は週5時間になっている。その他、体育の科目が週2時間で、サッカーの科目が1時間となっている。担当の科目が週3時間となっている。学校、品德、音楽と美術は週2時間である。安全、故郷の科目が週1時間となっている。

モンゴル民族に関する科目としては、まずモンゴル語がある。毎日1~2時間であり、週8時間となっている。その他、故郷の科目である。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に

表1 バヤンウンドゥル小学校1年生の時間割  
(出典：バヤンウンドゥル小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50~8:30	数学	数学	数学	数学	数学
2限	8:40~9:20	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
3限	9:50~10:30	品德	体育	音楽	学校	体育
4限	10:40~11:20	音楽	モンゴル語	体育	安全	品德
5限	14:40~15:20	美術	故郷	学校	サッカー	美術
6限	15:50~16:30	モンゴル語	担当	モンゴル語	担当	担当
7限	16:40~17:20					

関する知識を教えているという。詳細な内容は後で述べる。

### 2.3.2「故郷」の時間の教育内容の分析

モンゴル文化に関する科目としてはモンゴル語と「故郷」がある。

まず、「故郷」の時間は1週間に1時間である。この学校では、「故郷」の1時間を用いて、モンゴル民族の伝統的工芸品について教えている。新学期の始めに、この「故郷」の担当の教諭から生徒たちに、家族と一緒に一つのモンゴル民族の伝統工芸品を手造りする宿題を残す。次の週から生徒の出来

上がりの作品を「モンゴル文化交流室」(写真2)にて、展示し、作者の順番で作品の紹介するようになっていく。同じ物を作った生徒たちが一つのグループになって、手造りの過程と各部分の名前からどんな時に使うもの、どう使うなどの説明をする。以下はその作品(写真2~6)である。

この授業の内容から見ると、牧畜地域では、教諭たちは、民族伝統文化を教室の中で、生徒たちに説明して教えているのみなく、モンゴル民族文化に触れ合う機会を作ってくれたことが分かる。

### 2.3.3 民族文化の伝統行事への参加状況

牧畜地域で毎年行われているナーダムには、学校側が積極的に参加している。この地域では毎年7月末に3日から4日間行われる。この学校の校長先生の話によると、毎年学生たちは任意でこのナーダムに参加している。男子学生は子供の相撲、子供の弓、競馬にも参加することがある。この他、馬頭琴の演奏と民族舞踊にも参加しているという。このバヤンウンドウルソムのナーダムはちょうど夏休みの期間中に行われるが、ナーダムに参加する生徒たちは、学校に集まり、馬頭琴の演奏の練習と舞踊の練習をしているという。競馬と相撲、弓に参加する生徒は、自分たちの家の練習できるところに集まり練習する。例えば、同じ村の子供たちが集まり、弓と相撲をして遊ぶ。

校長の話によると、この毎年のナーダムはモンゴルの子供たちにとって、最も民族文化を体験し、理解できる機会になっているという。また、子供たちの伝統文化に対する好奇心を育て、アイデンティティにも大きな影響を与えており、生徒たちは楽しんで参加したことで伝統文化が自然に身に付けることができると語った。

以下はバヤンウンドウル小学校の伝統文化体験の授業様子と実際のモンゴルゲルの模擬を用いて、モンゴルゲルの組み立てについての説明している様子である(写真7)。教諭への聞き取り調査で、バヤンウンドウル小学校では、1学期に4回、「担当」の



写真2 「モンゴル文化交流室」の様子

(出典:2014年3月、バヤンウンドウル小学校にて、筆者撮影。)



写真3 モンゴルゲル

(出典:ともに2014年3月、バヤンウンドウル小学校にて、筆者撮影。)



写真4 タバコ入れ



写真5 牛車

(出典:ともに2014年3月、バヤンウンドウル小学校にて、筆者撮影。)



写真6 鞍



写真7 モンゴルゲルの組み立てについて説明している様子

(出典:2014年3月、バヤンウンドウル小学校にて、サ教諭提供。)



授業を用いて、民族伝統文化の専門家を招いて、授業をしていることが分かった。

このように、モンゴル民族伝統文化の専門家を招いて、モンゴル民族伝統文化に関する知識を教える授業は、学校統合前にはなかった。学校統合により、生徒たちは、実際の遊牧生活から離れ、モンゴル民族伝統文化に触れ合う機会が少なくなったことを補うために行われた教育であると考えられる。

### 2.3.4 生徒たちの日常の寄宿生活実態

表2をみると、本学の寄宿制生徒たちの一日の流れが分かる。寄宿生活をしている生徒たちは、5時30分に起床、体操、自習、朝食を済ませて、8時から1限の授業が始まる。午前中は4つの授業がある。1時限の授業時間は40分である。2限目と3限目の間に30分の目の体操がある。昼食の時間は40分で、昼寝の時間は1時間40分である。中国では、職場は日本と比べて、昼休みが長く、昼休みは家に帰って食事をするのが一般的である。また、中国では、冬と夏の休み時間が変わり、夏は昼寝の時間が設けられる。午後には、3つの授業がある。5時から朗読の時間が40分ある。その後、夕食の時間1時間と40分の復習時間が2回あり、8時30分に就寝となっている。生徒たちが、教室外で活動できるのは、朝の体操(5:50~6:20)だけになっている。

寄宿生の日常生活について、寄宿舎の管理人のD氏は次のように語った。

#### <事例4>

D氏(バヤンウンドゥル小学校の寄宿舎管理人、40代、女性)

この一日の課程表は、生徒たちの一日の生活の流れである。子供たちは、自分の遊ぶ自

由時間がない。学校の統合により、寄宿制学校になったことで、生徒数も前より増え、学校の管理が厳しくなった。生徒たちの安全を考えたうえで、勉強する時間を長くしている。

D氏の語りから分かるのは、学校統合により学校側が責任と管理を強くするという必要性を認識していることが分かる。

### 2.3.5 牧畜地域における民族小学校の変化

#### ①生徒数と教諭数の変化

統合後のバヤンウンドゥル小学校に通うべき子供たちは620名のはずだったが、151名の生徒は他の都会や近くのソムの学校に移り、生徒数が確実に減った。また、学校統合前のアイル・ガチャの18校の教師は皆民間教師で教師の免許証を待たなくても教室で授業を教えることができた。しかし、統合後のバヤンウンドゥル小学校が教育庁の命令に従い、教師の質の問題という理由で、教師の免許証を持たない前の学校の教諭を雇うことができなかった。そのため、学校の教諭の不足状況が生じた。

#### ②学校の施設の変化

学校統合前に、各アイル・ガチャの学校の施設が不十分だった。18校の15校が教室だけで、体育館などの遊ぶ場所もなかった。バヤンウンドゥルソムの北部の10校の学校では、電話もなかった。教諭がソムに来ないと何の情報も得られないという状況だった。学校統合に伴い体育館、文化交流室などの施設が増えた。

#### ③民族伝統生活に触れ合う機会

生徒たちが学校統合前には、毎日のように民族伝

表2 寄宿生徒たちの一日  
(出典：バヤンウンドゥル小学校のモンゴル語資料に基づき筆者作成。)

起床	5:30	昼寝	12:30~14:10
体操	5:50~6:20	予備	14:20~14:30
自習	6:20~7:00	5限	14:30~15:10
朝食	7:00~7:50	6限	15:20~16:00
予備	7:50~8:00	7限	16:10~16:50
1限	8:00~8:40	朗読	17:00~17:40
2限	8:50~9:30	夕食	17:40~18:40
目の体操	9:30~10:10	復習1	18:40~19:20
3限	10:10~10:50	復習2	19:30~20:10
4限	11:00~11:40	寝る	20:30
昼食	11:40~12:20		



統生活に触れ合いながら育てた。学校統合後の寄宿制生活により、その機会を失った。

④家庭教育からの離れ

学校統合により、寄宿制生活をする事により、多くの時間を学校で過ごす事になった。家庭で家族という時間は非常に短くなった。従来の家庭での伝統的な教育ができなくなった。

牧畜地域の民族小学校において、学校統合により民族の言語で民族教育を受ける生徒数は確実に減少し、家庭教育ができなくなった。民族小学校では、施設が良くなり、教育の質が良くなった。モンゴル民族伝統文化に関する活動と授業を積極的に取り込んでいる。

2.4 都市部のモンゴル民族小学校の変遷

赤峰市モンゴル民族実験小学校は1956年に設立され、赤峰市都市部の唯一の民族小学校である。この小学校は、紅山区、松山区、元宝山区のモンゴル民族の子供と12の旗県からの出稼ぎ労働者(牧民、農民を含む)の子供たちに教育する義務を負っている。

2011年には、「民族伝統文化教育」の基地であると評価された。

2.4.1 対象地域の特徴

赤峰市の都市部の紅山区は赤峰市の政治、経済、文化、交通の中心である。紅山区には、27の村、53の住宅地がある。人口45.6万人のうち、漢民族が約74%、モンゴル民族が約17.8%を占めている。都市部は比較的経済が発展し、地方より漢化が進んでいる。第二次、第三次産業の従事者は49.8%を占めており、赤峰部の生徒の親はほとんど、公務員、教師、サラリーマン、あるいは商売などの自営業を営んでいる。そのため、伝統的な遊牧生活から離れ、学生たちは、モンゴル民族の伝統的な年中行事へ参加ができない。

2.4.2 赤峰市モンゴル民族実験小学校の過去

赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、21年間モンゴル語の担当をしているJ氏は次のように語っていた。

<事例5> J氏(赤峰市モンゴル民族実験小学校のモンゴル語の担当教諭、50代、女性)

10年前と比べると、この小学校の生徒たちのモンゴル語の成績が大きく低下した。読書の時、読めない字が多くなった。作文を書

く時の文字、語彙の使い方が下手になった。モンゴル語で話す時、漢語と混ぜて話すのが現状である。

この事例から見ると、都市部の民族小学校では、モンゴル語の能力が低下していることが分かる。

また、赤峰市モンゴル民族実験小学校の教導主任が、モンゴル民族文化の教育について、以下のように語っていた。

<事例6> K氏(赤峰市モンゴル民族実験小学校の教導主任、50代、男性)

2010年から、教育庁から、モンゴル民族の伝統文化を発展させる目的で資金を積極的に民族学校に投資して活動を行い始めた。その重点を民族小学校に置いた。学校側が投資を受けた後、学校内に「民族」などの民族文化に関する科目を設置した。また、「文化交流室」などを設置し、生徒たちにモンゴル文化に触れ合う体験する機会を作った。また、学校の建物もモンゴル民族雰囲気でするようにしている。

この事例から見ると、教育庁から、民族伝統文化を尊重し、発展させることを強調した上で、実際に教育が行われていることが分かる。

2.5 赤峰市モンゴル民族実験小学校の現状

赤峰市モンゴル民族実験小学校(写真8)は1956年に設立され、赤峰市都市部の唯一の民族小学校である。現在、教師は84名、そのうち、モンゴル族37名(約44%)、漢民族47名(約56%)である。生徒数は710名、そのうち、モンゴル民族の生徒は170名(約24%)、漢民族の生徒は540名(約76%)である。



写真8 赤峰市モンゴル民族実験小学校 (出典：2014年6月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。)

2.5.1 時間割と各教科の時間数の分析

以下の表3に示すように、小学1年生の授業はモンゴル語、数学、体育、音楽、美術、品德、手芸、

安全、民族の9科目がある。モンゴル語は毎日2時間で、週当たり10時間である。数学は週当たり8時間になっている。その他、体育の科目が週3時間で、手芸と美術は週2時間である。品德、音楽、安全、民族の科目が週当たり1時間となっている。

モンゴル民族の文化に関する科目としては、まずモンゴル語がある。毎日2時間あり、母語の教育を重視していることが分かる。その他、民族の科目である。この授業は、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。詳細な内容は後で述べる。

以下の表4に示すように、小学2年生の授業はモンゴル語、中国語、数学、体育、音楽、美術、品德、手芸、安全、民族の10科目がある。モンゴル語は毎日1～2時間で、週9時間で、週7時間になっている。中国語が週4時間となっている。その他、

体育の科目が週3時間で、音楽と美術は週2時間である。品德、安全、民族の科目が週1時間となっている。

2年生になると、中国の科目が増える。中国内モンゴルでは、二言語教育は2年生から始まっている。中国語の科目が増えるにつれて、モンゴル語の時間が週1時間減ることになっている。モンゴル民族に関する科目としては、1年生と同じくまずモンゴル語がある。その他、民族の科目である。この授業は、モンゴル語の担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教えているという。

以下の表5に示すように、小学3年生の授業はモンゴル語、中国語、英語、数学、体育、音楽、美術、品德、科学、朗読、作文、安全、民族の13科目がある。モンゴル語は毎日1～2時間で、週8時間である。中国語が週4時間となっている。英語は週3

表3 赤峰市モンゴル民族実験小学校1年生の時間割  
(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50～8:30	品德	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語
2限	8:40～9:20	数学	数学	数学	数学	数学
3限	9:50～10:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	体育	モンゴル語
4限	10:40～11:20	体育	手造り	体育	数学	手造り
5限	14:40～15:20	モンゴル語	数学	数学	体育	民族
6限	15:50～16:30	美術	音楽	美術	モンゴル語	安全
7限	16:40～17:20					

表4 赤峰市モンゴル民族実験小学校2年生の時間割  
(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50～8:30	品德	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	数学
2限	8:40～9:20	数学	数学	数学	数学	モンゴル語
3限	9:50～10:30	モンゴル語	モンゴル語	モンゴル語	美術	中国語
4限	10:40～11:20	モンゴル語	数学	体育	中国語	音楽
5限	14:40～15:20	音楽	美術	中国語	民族	モンゴル語
6限	15:50～16:30	体育	中国語	数学	体育	安全
7限	16:40～17:20					

表5 赤峰市モンゴル民族実験小学校3年生の時間割  
(出典：赤峰市モンゴル民族実験小学校提供のモンゴル語資料。筆者訳。)

		月	火	水	木	金
1限	7:50～8:30	品德	数学	モンゴル語	数学	モンゴル語
2限	8:40～9:20	モンゴル語	モンゴル語	数学	モンゴル語	数学
3限	9:50～10:30	数学	美術	中国語	数学	音楽
4限	10:40～11:20	英語	体育	科学	英語	朗読
5限	14:40～15:20	中国語	英語	体育	民族	モンゴル語
6限	15:50～16:30	科学	中国語	モンゴル語	中国語	安全
7限	16:40～17:20	作文	モンゴル語	作文	体育	



時間となっている。数学は週当たり6時間になっている。その他、体育の科目が週当たり3時間で、科学と作文の授業が週当たり2時間である。音楽、美術、品德、安全、朗読、民族の科目が週当たり1時間となっている。

3年生になると、英語の科目が増える。中国内モンゴルでは、三言語教育は3年生から始まる。英語の科目が増えるにつれて、モンゴル語の時間がさらに週1時間減ることになる。モンゴル民族に関する科目としては、2年生と同様にモンゴル語がある。その他民族の科目があり、モンゴルの担当の教諭が授業をし、モンゴル文化に関する知識を教える。

2.5.2「民族」及び「朗読」の時間の教育内容の分析

表4、表5を見ると、1年生、2年生、3年生の時間割には、「民族」という科目が週当たり1時間となっている。教諭への聞き取り調査によると、この時間で、モンゴル語の担当教諭が『風俗の憧れ』(写真9)という教科書を用いて、生徒たちに民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を使用し、民族文化に触れ合う体験をしていることが分かった。

「民族」の授業で、この教科書の内容に沿って、実際的に、挨拶の仕方を演じたり、教えたりして、民族伝統文化に触れ合う体験をしているという。例えば、鞍(写真11)の組み立てとその部分の名前を本物の鞍を用いて、生徒に説明している。

また、この教科書の編集者のL氏は次のように語っていた。

<事例8> L氏(赤峰市モンゴル民族中学校の元教諭、50代、男性)

この教科書を編集しようと思ったきっかけは、都市部のモンゴル民族の子供たちに民族の優れた伝統生活習慣(風俗)を学ばせ、モンゴル民族の伝統習慣(風俗)に誇りを持ち、

憧れるような愛着をつけるためだ。その内容については、できるだけ、一番身近な民族の伝統日常生活の習慣の挨拶から始まるようにした。モンゴルの子供たちが都会にいても、民族の伝統的な日常生活を維持できるようにしたい。

民族の優れた文化を次世代に伝承させたい。



写真11 モンゴルゲルに展示している鞍 (出典：2014年6月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。)



写真12(左)『モンゴルの子供の読書』  
写真13(右)『モンゴルの歴史と文化の基礎知識』

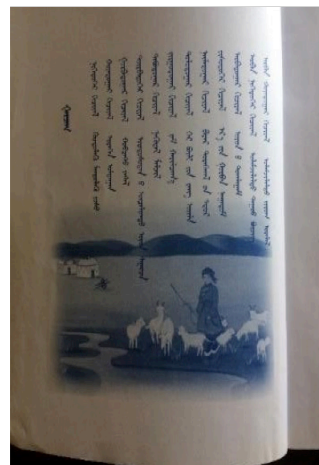


写真9『風俗の憧れ』表紙 写真10『風俗の憧れ』目次 (出典：『風俗の憧れ』編集者のへ氏が提供。)



写真14(左)『モンゴル皇帝らの集い』  
写真15(右)『男の三つの遊びの物語』 (出典：2014年6月、赤峰市モンゴル民族実験小学校にて、筆者撮影。)

このことからみると、L氏の個人の民族的アイデンティティは、非常に強く、モンゴル民族に誇りを持ち、モンゴル民族の生活習慣に憧れていることが分かる。また、モンゴル人教諭としての責任と義務を果たし、実際にモンゴル民族文化に関する教科書を編集している。

表を見ると、3年から「朗読」の科目が1週間に1時間ある。この「朗読」の科目が、教諭への聞き取り調査から、3年生から6年生まで1週間に1時間あることが分かった。この時間では、『モンゴルの子供の読書』、『モンゴルの歴史と文化の基礎知識』、『モンゴル皇帝らの集会』、『男の三つの遊びの物語』という4冊本(写真11～14)を読むようにしている。この4冊の本もL氏が編集したもので、この小学校が積極的に使用していることが分かった。

### 2.5.3 民族文化の伝統行事への参加状況

赤峰市モンゴル民族実験小学校では、「活動」の授業としては、清明節に、学校が烈士の碑(写真16)のまわりの掃除をする活動を組織し、行っている。その説明には中国語を使っている。毎年5月6日に行う。モンゴル族の生徒と漢族の生徒が共に参加しているため、モンゴル語で説明すると、漢族の生徒が理解できないという理由がある。一方、モンゴル族の生徒が中国語の説明を理解できない人がいないという。

この活動の授業の内容から見ると、モンゴル民族の伝統文化に関する内容が見られない。また、活動の内容の説明などを中国語で話していることから見ると、モンゴル語より中国語が社会的に使用されていることが分かる。



写真16 烈士の碑 写真17 烈士の名が刻まれた壁  
(出典:ともに2014年6月、烈士の碑にて筆者撮影。)

### 2.5.4 生徒たちの日常の生活実態

この小学校では、生徒全員が家から通っている。生徒達は、放課後に迎えに来た保護者と一緒に帰宅する。車で迎えに来る保護者もいれば、自転車で見送りに来る保護者、徒歩で見送りに来る保護者もいる。

筆者は放課後の観察で、保護者たちとの交流はほとんど中国語であったことに気づいた。また、生徒たちも校内から出ると大きな声で中国語だけを話すようになった。

ここでは、保護者M氏の子供の日常生活実態についての事例を取り上げ、また、他の多くの保護者に行った聞き取り調査の結果から、都市部の生徒全体の日常生活実態について述べることにする。

<事例14> M氏(赤峰市中国銀行会社員40代、女性)

私の子供は二年生である。毎朝6時半に起きています。7時までに、朝ご飯を食べて、7時半までには、学校に送っている。昼は、12時に迎えに来る。昼ご飯を食べたら、1時間ぐらいの昼寝をする。その後、14時半までに、学校までに送る。夕方は、17時半に迎えに来る。18時に家に着き、子供が先に宿題をする。宿題は、毎日1～2時間もかかる。夕ご飯を終えると、20時ぐらいになる。20時ぐらいから、1時間ぐらい中国語のアニメを見る。22時に寝るようにしている。

このように、筆者が保護者へのインタビューで、多くの子供たちが自由時間を中国語のアニメを見ることで使っていることが分かった。

### 2.5.5 都市部における民族小学校の変化

ここでは、赤峰市モンゴル民族実験小学校の過去と現状を比較し、その変化についてまとめる。

第一に地域の特徴からみると、都市部の生徒は、学校内外の日常的な生活の言語環境はほとんど漢語で、日常的に触れ合うゲームなども漢語を使うようになったことである。

社会の使用言語もほとんど漢語である。モンゴル語能力が低下したことで、モンゴル語の語彙、文字の喪失につながっている。

第二に、「二・三言語教育」により、モンゴル語の授業数が減ったことである。日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失である。伝統的な民族文化と触れ合う日常生活から切り離されたことで、モンゴル語の授業を理解しにくくなり、特に、民族習慣、遊牧生活に関する文字、語彙を理解できなくなった。

第三に、教育者が生徒たちに、モンゴル民族文化、民族生活習慣に関する教育と実際に触れ合う機会を与えたことである。例えば、モンゴル語の担当教諭が『風俗の憧れ』という教科書を用いて、生徒たち



に民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を使用し、触れ合う体験をしていることがある。

第四に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちはモンゴル民族の伝統行事への参加がほとんどできなくなったことである。逆に、漢民族と同じように祝っている。

第五に、モンゴル文化に興味を持つモンゴルの知識人たちが、モンゴル民族の伝統文化を重視して、民族教育現場で自分の貢献活動を行っていることである。

### 2.6 牧畜地域、都市部の民族教育の比較

牧畜地域、都市部の民族小学校における民族教育の比較(表6)を行う。

表6に示すように、時間割におけるモンゴル語の授業の数は週に、牧畜地域では8時間、都市部では、10時間となっている。モンゴル語の時間割の分析からみると、都市部の民族小学校では、モンゴル語の教育を最も重視していることが分かる。

牧畜地域では、「故郷」や「担当」の授業は週1時間と3時間となっている。「故郷」の時間を用いて、生徒たちの作ったモンゴル民族の伝統的工芸品を『モンゴル文化交流室』で、展示し、モンゴル民族伝統文化に触れ合う体験をしている。また、1学期に4回、「担当」の授業を用いて、モンゴル民族伝統文化の専門家を招いて、授業をしている。都市部では、「民族」と「朗読」の授業が週1時間となっ

ている。『風俗の憧れ』という教科書を用いて、生徒たちに民族の伝統習慣を教えながら、「文化交流室」を利用し、触れ合う体験をしている。また、「朗読」の時間を用いて、『モンゴル子供の読書』、『モンゴル歴史と文化の基礎知識』、『モンゴル皇帝らの盟会』、『男の三つの遊びの物語』という4つの本を読むようにしている。

この2校の学校外における民族教育を比較すると相違点がある。牧畜地域における民族教育学校では、モンゴル民族の伝統的なナーダムに積極的に参加している。都市部における民族小学校では祝日は漢民族と同様に祝い、民族伝統文化的な活動は行われていない。ナーダムへの参加もあまりみられない。農耕地域の小学校でも、モンゴル民族の伝統的な行事への参加がないことが分かった。

### 3. 考察

本論文では、中国内モンゴル自治区における学校統合に伴う民族教育の変容を明らかにし、その変化が民族教育に対してどのような影響をもたらしたかについて、現地調査に基づき考察した。

民族教育の変化をとらえる指標として、これまで、民族学校数、民族語で教育を受ける生徒数の減少という量的変化が注目されてきた。アルホルチン旗・バヤンウンドウルソムには、2005年までに、アイル、ガチャの18の小学校とバヤンウンドウルソムの中心部に置かれていたバヤンウンドウル総合学校

表6 牧畜地域、都市部の民族小学校における民族教育の比較  
(出典：現地調査の結果に基づき筆者作成。)

比較対象地域	牧畜地域	都市部
授業における民族教育の時間割	モンゴル語の授業は週8時間である。 故郷」や「担当」の授業で、民族伝統文化に触れ合う体験をしている。	モンゴル語の授業は週10時間である。 「民族」と「朗読」の授業で、民族伝統文化に触れ合う体験をしている。
民族の歴史	4回の授業中に民族の歴史の内容の説明がある。	「朗読」の時間を用いて、モンゴル民族の歴史の本を読んでいる。
授業以外の民族教育活動	民族舞踊・馬頭琴の演奏・ナーダムへの参加。	校内にモンゴルゲルの展示。
親の職業	牧畜業従事者は全労働人口の約86.8%を占めている。	第二次第三次産業の従事者は約49.8%を占めている。
教師の出身地	牧畜地方出身が約91%を占める。	都市部出身が約83%を占める。

を合わせて19校の学校があった。2011年までに、各アイル、ガチャの18校の民族小学校を移動させ、バヤンウンドゥルソムの中心部には、一つだけ寄宿制小学校が成立した。学校の名を「バヤンウンドゥル小学校」へと変更した。これは、大規模な統合ではあるが、計算上は民族語で民族文化の教育を受ける生徒数は変わらないはずであった。しかしながら、経済的な理由や親元を離れた寄宿舎生活をする環境の変化などに慣れることができず不登校となる生徒が増えた。すなわち、民族の言語で民族文化の教育を受ける生徒数は、統合により確実に減少していた。

牧畜地域の教育現場では、第一に、生徒たちが日常生活（衣、食、住、言語、生活習慣）において民族文化から離れ、農村や都市部の影響を受けたことが大きな変化である。学校統合前は、民族文化の重要な部分である牧畜生活の中で日常的にモンゴル語を話し、牧畜生活に密着したモンゴル語と文字、語彙が自然に身に付けられていた。しかし、学校統合後は、漢化が進んだチャブガの周辺で話される言語がほぼ漢語になっている。

第二に、学校が実家から遠く離れたことで、不登校の生徒の数が増えた上に家庭教育ができなくなった。また統合前は、自宅から通う生徒たちを地域の人々が見守りながら社会的なしつけを行っていた。しかし、閉鎖的な寄宿舎生活では社会への参加ができなくなっている。家族から離れ、家族から受ける家庭教育の機会を失うことで、学校での学習ができて、モンゴル人としての伝統的モラルや礼儀作法の認識が低下している。第三に、学校統合前は、ナーダムなどの民族文化体験が生徒たちの民族文化に対する関心を育み、民族意識を高めることに大きな影響を与えていたが、学校統合により、生徒たちが牧畜地域の実家から遠く離れ、寄宿舎で生活せざるを得なくなった。寄宿舎生活により、日常生活の中で触れていた牧畜文化に接する機会が失われ、民族生活や文化体験の機会も失われている。これにより生徒たちの民族意識が低下していると考えられる。

第四に、学校統合前のアイル・ガチャの18校の教師は皆民間教師で教師の免許証を待たなくても教室で授業を教えることができた。しかし、統合後のバヤンウンドゥル小学校が教育庁の命令に従い、教師の質の問題という理由で、教師の免許証を持たない前の学校の教諭を雇うことができなかった。そのため、学校の教諭の不足状況と民間教師の失業問題が起きた。

都市部の教育現場では、第一に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちのモンゴル語の能力低下が、大きな変化としてあげられる。生徒たちは都市化の影響を受け、日常的な生活の言語環境はほとんど漢語となり、日常的に触れ合うゲームなども漢語を使

うようになった。モンゴル語能力が低下したことで、モンゴル語の語彙、文字の喪失に繋がった。

第二に、日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失である。伝統的な民族文化と触れ合う日常生活から切り離されたことで、モンゴル語の授業を理解しにくくなり、特に、民族習慣、遊牧生活に関する語彙を理解できなくなった。

第三に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちはモンゴル民族の伝統行事への参加がほとんどできなくなった。民族生活や文化体験の機会が失われることにより、生徒たちの民族意識が低下した。

学校統合政策による保護者への影響も無視できない。ガチャにおいて民族小学校がなくなったことにより、牧民たちの経済的負担が増加した。統合先の学校が家から遠くなり、交通費、高い寄宿舎生活費などが多くの家庭に負担となり、それが準備できない家庭の子供は不登校になる。このように、ここでは義務教育を保障するという本来の目的から逸脱する事例さえ現れている。また、民族小学校が遠くなったことで、近くの小学校（漢語小学校）に子供を通わせるようになった家庭もあり、民族学校に行く生徒をさらに減少させることになる。

また統合前は、自宅から通う生徒たちを地域の人々が見守りながら社会的な礼儀作法を教えていた。しかし、閉鎖的な寄宿舎生活では社会への参加ができなくなっている。

そして家族から離れ、家族から受ける家庭教育の機会を失うことで、学校での学習ができて、モンゴル人としての伝統的モラルや礼儀作法の認識が低下している。

学校統合の結果は、民族教育だけでなく、牧民たちの牧畜生活にも大きな影響を与えている。このように民族教育の変化は地域社会や日常生活における民族文化の変化と相互に作用しながら、モンゴル民族伝統文や民族意識にも大きな変化をもたらしている。

本研究は、国家政策の影響を強く受けて、実際に内モンゴル自治区赤峰市において進められたモンゴル民族学校の統合の実態と学校統合が民族教育に及ぼした影響を分析したものである。また、歴史的な背景により赤峰市は、牧畜地域、農耕地域、都市部から構成されている。そこで、それぞれの地域でのその影響の現れ方の違いについても指摘した。その中でもとりわけ深刻な影響があったのは、牧畜地域のバヤンウンドゥルソムの中学校および民族教育であった。そこでは、民族文化や民族教育を振興するという国家政策の下で実施された学校統合が、その目的とは逆の効果をもたらしているという現実が明らかとなった。民族文化や民族教育を振興する教育政策は、牧畜地域、都市部など地域の多様性や歴史



的背景を丁寧にふまえる必要があるということが、本研究が示唆するところである。そのためには、一律の政策展開ではなく、各地域の内発的な発展を促進するものでなければならない。とりわけモンゴル民族の伝統文化を生活の中で保持している牧畜地域に焦点を当てた政策展開が求められていると考えられる。

#### 4. 今後の課題

ここで得られたこのような示唆は、他の少数民族地域において、国家的な民族文化振興政策を推進する際にも、ふまえらるべきである。星野(2009)は、2000年以降の新疆ウイグル自治区の民族教育について、民族教育政策の背景に、少数民族にとっても中国が祖国であること、少数民族も中華民族の一員であること、少数民族の歴史は中国の歴史の一部であることなど、国家、民族、文化、歴史の認識をめぐり、少数民族を中華文化に包摂しようとの狙いがあると指摘した。また、言語についても「二言語教育」教育を実施する過程で、少数民族学校と漢語学校の合併や少数民族の教諭の漢語能力チェックが実施され、実質的に少数民族に対する漢語の国語化が目指されているとも指摘している。本研究では、民族文化や民族教育を振興するという国家政策の下で実施された学校統合が、その目的とは逆の効果をもたらしているという現実が明らかになった。以下では、今後の課題について、二つに分けて述べる。

一つ目は、本論文では、民族小学校に注目して、民族教育の変化を明らかにしている。さらに、民族幼稚園の民族教育の変化が重要な課題であり、研究する必要がある。中国におけるモンゴル民族の幼児の就園者が増える一方、民族教育を受ける幼児人口の割合は減少しているのが現状である。特に、都市部におけるモンゴル民族では、都市化の影響を受け、保護者たちの価値観が変わり、子供を漢語の幼稚園に送る現象が増加している。モンゴル民族にとって、どの言語の学校を選択するかが子供の言語の獲得、アイデンティティの形成などの様々な問題と関係している。

二つ目は、このような教育政策の下での内モンゴルの民族教育の変容が中国の少数民族教育全体にも起き得るということが予測される。中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の民族教育、民族学校についての本研究を、さらに一般化するために、新疆のウイグル民族、チベット民族、回民族、朝鮮民族などの自分の言語で教育を行われている少数民族地域の研究が必要であると考えられる。

#### 参考文献

阿拉塔(2011)「中国・内モンゴル地域における民族教育に関する人類学的研究」、広島大学博士(学

- 術)論文、広島大学  
 アリゴン(2017)「赤峰市のモンゴル語使用状況についての研究」内モンゴル大学博士(学術)論文、内モンゴル大学  
 鳥力更(2013b)「中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究」、『仏教大学大学院紀要』、第41号、pp.1-17、佛教大学教育学研究科編  
 岡本雅享(1998)「中国の少数民族政策と言語政策」社会評論社、  
 温都日那(2007)『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』溪水社、  
 格日樂(2006)「中国民族教育における教育自治権について：民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に」『一橋法学』第5巻第3号、pp.1041-1064 韓達主編(1998年)『中国少数民族教育史』、p.103、云南出版社、  
 張瓊華(2007)『中国における多文化教育のメカニズムと機能に関する研究—民族共生と社会統合の視点から—』、雄松堂出版、  
 哈斯額爾敦(2005)「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題：内モンゴル自治区の民族教育を中心に」『多元文化』5巻、名古屋大学、pp.265-280  
 哈斯額爾敦(2017)「牧畜地域の学校配置調整政策の性格とその問題の社会学の研究」、『内モンゴル社会科学』、4期、1-6、呼和浩特内モンゴル社会科学雑誌社、  
 ハスゲレル(2005)「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題」『国際教育』第11号、pp.43-62、日本国際教育学会  
 ムンクバト(2013)「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の学校教育の現状について甲・乙式学級の「モンゴル語」教科書比較から」千葉大学『ユーラシア言語文化論集』15号、pp.121-130  
 ムンクバト(2014)「内モンゴル自治区におけるモンゴル文字の使用について—その使用事例や法律規定からの考察—」『千葉大学人文社会科学学研究』第28号、pp.237-247  
 内モンゴル科学技術出版社(2003)『アルホルチン統計年鑑』、p.118、内モンゴル科学技術出版社、  
 内モンゴル教育出版社(2004)『内蒙古民族教育工作手冊』内モンゴル教育出版社、  
 内モンゴル自治区教育庁民族教育所(2011)「内モンゴル民族教育仕事マニュアル」内モンゴル民族教育出版社、  
 内モンゴル自治区統計局(2009)「内モンゴル統計年鑑2009」中国統計出版社、  
 内モンゴル自治区統計局(2010)「内モンゴル統計年鑑2010」中国統計出版社、

ウラントク（1994）『内モンゴル民族教育の一般的な状況』内モンゴル文化出版社、  
ザバ他（2009）「モンゴル学百科全書・教育」内モンゴル人民出版社、  
チャイザモソ（1999）「アルホルチン旗教育志」内モンゴル科学技術出版社、赤峰市 柳子竜、旺吉拉（2008）「アルホルチン旗教育志（続）」内モンゴル文化出版社、